2025年2月23日（日）主日朝礼拝説教

『堕落とは』井上隆晶牧師
創世記3章1～13節、マルコ福音書12章28～34節

❶【罪とは、本当の人になれないこと】

私たちは何から救われるのでしょう。それは「堕落した罪深い状態から」と答えることができるでしょう。そこで今日は堕落とは何かについて話したいと思います。
創世記３章は人間の罪の始まりについて書かれています。エデンの園の中央には「命の木」と「善悪の知識の木」がありましたが、神はアダムに「**園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。**」（創世記 2：17）と命じられました。この二本の木は、人生の二つの生き方の象徴として描かれています。命の木とは、神によって生きる生き方の象徴であり、善悪の知識の木とは神の様に知恵を得て賢くなり、自分の力で生きる生き方の象徴です。人間は神から自由意志を与えられているので、最初から神と共に生きる生き方と、神から離れて生きる生き方の二つの選択があったことを教えているのです。では罪とは何でしょう。罪を現わす「ハマルティア」というギリシャ語は、「**的をはずす**」という意味です。**罪を、戒めに違反する事というように法律的にとらえないようにしましょう。むしろ、人間存在全体が本当の人間になれていない状態のことをさしていると思ってください。**それは今のこの世界を見ても分かるでしょう。戦争を行う人、自分の利益でしか物を考えない国の指導者、自分の子供を平気で殺す親など、「これが人のする事か！」「人として恥ずかしくないのか！」「人で無し（人ではない）！」と、よく言われるでしょう。三位一体である神のイメージとして人間が創造されているということは、本当の人というのは、互いに愛し合うものなのです。それがそうなっていないことが罪なのです。

●神学生の時、よく授業の中で言われました。「本当に人と言えるのはイエス･キリストだけである。私たちは皆、人になれていない。人でなしだ。」

❷【悪魔との対話】

ではどうしてそうなってしまったのでしょう。エデンの園に蛇がいました。蛇は悪魔の象徴として描かれます。蛇は女にいいました。「**園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。**」（創世記３：1）神は「**園のすべての木から取って食べなさい**」と言われましたから、悪魔は神とまったく逆の言葉（嘘）を語るのが分かります。神はいいかげんな方であると思わせ、エバの心を不安にさせ神に対して疑いを起こさせるためです。エバは「**私たちは園の木の果実を食べても良いのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけな**

い、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」(3：3）と答えます。エバは命の木も禁じられた木として入れてしまい、「触れてもいけない」という言葉も加えてしまいました。そこで悪魔は「**決して死ぬことはない。それを食べると目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。**」（3：4～5）と嘘を断言します。

●先日、大学時代に１年間だけ統一協会に入信した弁護士の話を聞きました。「22歳の若い時に、ストレートに罪は遺伝すると断言されると心が動揺するのです。」と言っていました。カルトは断言しますが、教会は断言しません。だからカルトのいう事に引きずられて行ってしまうのです。

二人が善悪の知識の木の実を取って食べると悪魔が言ったように目は開くのですが、この世に対して開いたのです。彼らは自分たちが裸であることを知り、いちじくの葉で腰を覆います。「**裸**」とは弱さの象徴です。人間は自分の弱さを知って恐れ、様々なもので飾り始めたということです。知識を手に入れた人間は、ますます不安になるのです。自分が弱いことを知っているからです。

❸【罪の結果～交わりの喪失～】

罪の結果として、どうなったのでしょう。神が歩く音を聞いたアダムとエバは「**主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れ**」ます。神がアダムと呼ぶと「**あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。私は裸ですから。**」（創世記 3：10）と答えます。さらに木の実を食べた理由をエバのせいにし、エバは蛇のせいにしました。**ここに罪によってどんどん「関係」が崩れてゆく様子が書かれています。人は神から遠ざかり、さらに共に生きる人に対しても遠ざかった生き方をするようになるのです。交わりの喪失、これが罪の症状なのです。**4世紀の聖マカリオスは「**地獄では人は互いの顔を見ようとはしません**」といいました。**神から遠ざかった人は、やがて神の声を聞けなくなり、自分からも聞かなくなります。神を見なくなり、見えなくなります。人からも遠ざかり、やがて自分の中に閉じこもってしまいます。どんどん曇ってゆくのです。**アダムは神の言葉を聞くこと、神を見ることに失敗したのです。だからこそ私たちはこの交わりを回復しなければなりません。

●戦前、中国の熱河に伝道した沢崎堅造先生が「荒野へ」という一文を残しています。「荒野とはいかなる処か。私の興味は次第にここに集中してきた。調べてみると、荒野とは原来『語る』という動詞から来ている。声のある所という意味になろう。それはいかなることか。荒野とは人無き、声無き所であると誰もが考えるであろうに。私は不思議に思ったので、さらに調べさらに考えてみた。私が朝早く独り荒野に出るのは、全く人里を離れた静かな所が欲しいからである。静かに祈り、ひとり聖書に親しみたいからである。…それは神語るところ、神の声のあるところという意味である。…荒野は人無き所である。しかし神がいる所である。荒野は神語る所である。しかし悪魔の声もする所である。また天使の声もする所である。しかし神が語る時は、一切の声は沈黙に帰してしまうであろう。更に面白いことは、ヘブル語で聖所はデビ

ール（debir）と言うが、これは荒野を意味するドベル（dober）と極めて密接な関係があるであろうという事である。聖所または至聖所は、…そこで神託を受けるのである。神語る所である。祭司はこれを聞き、預言者はこれを伝えるのである。」

神の声を聞くためには、人の声から離れなければなりません。私たちの日常は、人の声で溢れています。ＴＶも雑誌も、報道も、会議も人の声です。そこからは神の声は聞こえてきません。現代人は静まる時を知りません。シナイ山の麓にもっとも古い修道院である聖カタリナ修道院があります。修道院というのは人里離れた荒野の中や崖の上に建てられました。それは「**町中には滅びがあります。**」（詩編 55：12）と詩編に書かれているので、荒野に出かけていったのだということを聞いたことがあります。人の中では神に出会えないのです。エリヤもモーセも荒野で神と出会いました。イエス様でさえも、朝早く起き、人里を離れた所で祈っておられます。信仰が育まれるのはこの荒野でなのです。
先週読んだ聖書の中に、大勢の人が家の中でイエス様の周りに座って話を聞いていた時に、イエス様の母マリアや兄弟たちがイエス様を呼びに来たという話がのっています。その時イエス様は、外に出て行かずに、ご自分の周りに座っている人たちを見て「**私の母、私の兄弟とは誰か、…見なさい。ここに私の母、私の兄弟がいる。**」（マルコ 3：34）と言われました。**教会とはキリストを中心として集まり、キリストの周りに座って、主の言葉に耳を傾ける人たちの群れなのです。そのような人こそ、イエス様は本当に自分の家族なのだと呼んでくださいます。**
祈りもそうです。祈りというものを自分が神に熱心に語ることだと思っている人がいますが違います。**祈りとは静まって神の声を聞くことです。**少年サムエルを思い出してください。「**どうぞお話ください。僕は聞いております。**」（サムエル上 3：10）と言いました。語るのは主であって、私たちではありません。修道院の祈祷が、なぜ多くの詩編、祈祷文、聖書を朗読するのか分かりますか。それに耳を傾け、聞くためです。修道院の祈祷には、自由祈祷はありません。ひたすらみ言葉を聞くのです。このような祈りを私は失いたくありません。

●榎本保郎牧師はこう書いています。「今日しばしば『主のことばを聞くことの飢饉』という預言者アモスの警告を聞く。たしかに今日の教会が、また信徒が力が弱いのは『主のことば』に立っていないところにある。…今日、あなたにとっても、私にとっても荒野に立つ時が少ない。…人の一致も、組織の拡大も必要であろう。だが、もし神のことばが聞かれないならは、電流の流れない電球のようなものである。…私たちも神の言葉によって初めて意味を持ち、力を発揮できるのである。」

神の声が聞こえて来るまで、私たちも一人になって荒野に退きましょう。「**どうぞお話ください。僕は聞いております。**」と祈りましょう。神の言葉をしっかりと聞いて、それに従って生きるという基本に帰りたいと思います。